

ロント交響楽団の東京での再度の演奏が予定されている。

このほか、音楽部門では、昨年西武劇場での「今日の音楽76」にネクサス、今年と同じ催し77にはリリック・アーツ・トリオが参加しており、女性歌手のアン・マレーやカントリー・シンガールのマレイ・マクローランドとブルース・コックバーンがあいついで来日している。

一方、日本からは、国際交流基金事業部の援助で、一九七三年には文楽がバンクーバーとオタワを、日本の伝統と現代音楽グループがオタワを、七四年には野村万作氏を団長とする野村狂言団がオタワ、ウルフビル、ハリファックス、喜多能楽団がバンクーバー、トロントを、七五年にはヨシ・アンド・カンパニー・グループがバンクーバー、モントリオール、ストラトフォードを、七六年には国立劇場俳優研究生一行がニューブランズウィック州マウント・アリソン大学、児童劇団「風の子」がエドモントン・カルガリー、東京交響楽団がバンクーバーを



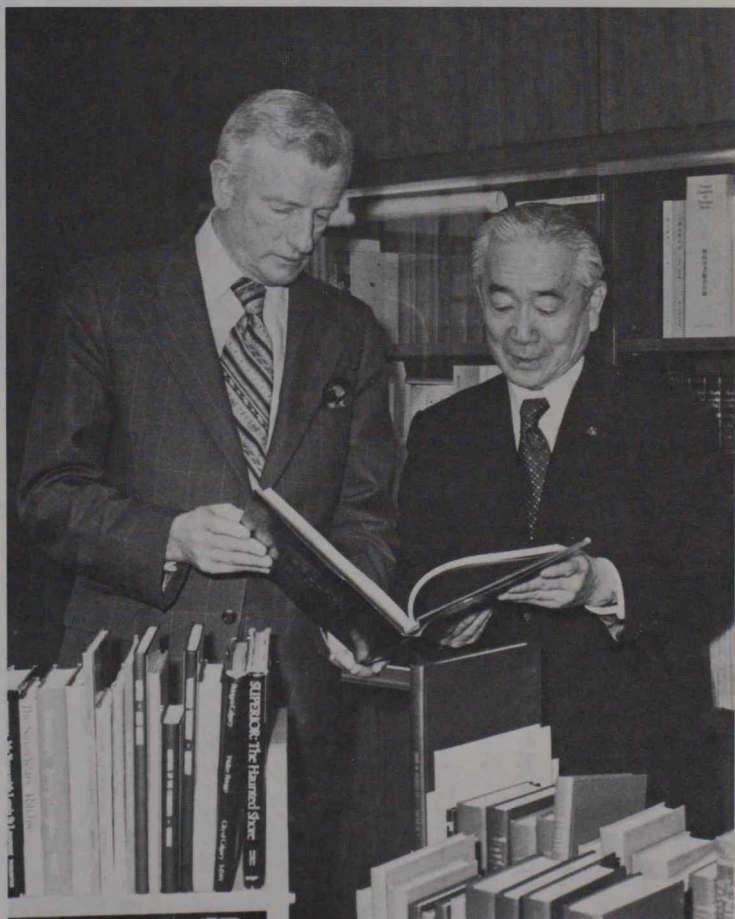
好評を呼んだリリック・アーツ・トリオ

訪問し公演している。

教育・学術交流

戦前・戦後にかけて、個人的にカナダの大学に留学した日本人は多く、医学、ジャーナリズム、歴史、理工学、社会福祉などの各分野で活躍している。一九五八年には、政府（カナダ文化振興会）奨学金によるカナダ留学が日本人にも適用されることになり、一九六四年までに合計二〇人がその恩恵を受けた。この制度は、カナダ文化振興会がカナダ人芸術家、研究者に対する援助を優先するという方針をとったため、公費留学の制度は中断した。（カナダから日本への公費留学は、文部省の海外留学生奨学金によって、一九五六年から昨年までに合計五十四人が来日している。）

こうした事情の中で、前記のように一九六七年頃から日加の親善友好関係が急速に進んでカナダへの留学希望者も急増するようになった。日加文化交流の促進を方針として打出したカナダ外務省は、文化交流計画による奨学制度を一九七四年から日本人にも適用し、満三十五才以下の既に学士号を取得している人（芸術家の場合は学士相当の芸術的基礎能力を身につけた人）に、往復渡航費、授業料、生活費（一九七七年度留学生の場合月額三二五ドル）を支給して、カナダの大学院に留学させることになった。これに基づいて、七四年度に四人、七五年度に七人、七六年度に九人がカナダへ留学している。なお、この制度に一九七六年度から、既に博士号を取得している人で、カナダでの研究を希望する人を対象とする特別研究資金が追加され、七六年度は二人の大



国会図書館に寄贈した本を前に、ランキン駐日カナダ大使と宮坂館長。

学教授が選ばれて渡航した。さらに、日加学術交流の大きな柱として自然科学分野における交流があげられる。カナダ国立科学研究所（ナショナル・リサーチ・カウンシル）のポスト・ドクトレト・フェローシップ（博士号取得者の研究資金）が日本人科学者にも適用されるようになったのは一九五二年（昭和二十七年）のことで、これまでに三百人以上の科学者がカナダで研究生活をし、日加相互の科学の振興に貢献している。このほか、自然科学分野では、一九七六年四月発効の日本学術振興会とカナダ・ナショナル・リサーチ・カウンセルとの学術協定により、今年から毎年数名の日本人科学者がナショナル・リサーチ・カウンシルその他カナダの研究機関に派遣されることになっている。

このように奨学金または特別研究資金による留学生、研究者の交流が活発になるとともに、カナダ政府は、一九七四年当時の田中総理とトルドー首相の合意による日本でのカナダ研究、カナダでの日本研究を振興することにも積極的に乗り出し、カナダ国内ではブリティッシュ・コロンビア大学、トロント大学、モントリオール大学、アルバータ大学に日本研究の学科を設けることを補助するとともに、七六年度にヨーク大学のヘンリー・ネルズ准教授を派遣して、日本におけるカナダ研究に意欲あるところを示した。同教授は筑波、慶応両大学で学部および大学院学生（約百名）に、カナダの歴史を中心としたカナダ講座を担当した。また短期間ながら国際キリスト教大学でも講義した。今年九月からはマウント・アリソ